

職場における精神健康に関する研究

渡 辺 直 登

I 問題と目的

職場で働く人々は、その労働によって様々な欲求を充足しようとする。しかし、その充足が不十分であったり長期間にわたって阻害された場合には、精神的な健康を害したり、積極的な精神健康へ向かおうとするエネルギーを沈滞させたりするといわれている。

Maslow, A. H. (1970) は、その欲求階層理論の中で、「精神的に健康な人は、基本的な欲求を十分に満足させており、高次動機に動機づけられる」と述べ、欲求の充足と精神健康との関係に関する論を展開している。しかし、彼の提唱する理論の検証を試みた研究は、ほとんど失敗に終わっている。

Alderfer, C. P. (1969, 1972) は、Maslow の理論を発展的な方向へ改変し、ERG理論と呼ばれる新たな欲求階層理論を提唱している。

彼は欲求を、Existence Need, Relatedness Need, Growth Need の3つに分類し、これらの欲求の階層性に関する7つの仮説をかかげている。この仮説は、Maslowの理論にはない、高次欲求の不満足が低次欲求への願望を生み出すという考え方を含む点に特色がある。

このERG理論に関する実際的な検討は、いくつかの研究で行われているが、その欲求階層に関する仮説は、被験者の属する組織のタイプによって、支持されたり支持されなかったりするという結果に終わっている。

これとは別に、Herzberg, F. (1961) は、二要因理論と精神健康概念を結びつけ、精神的に健康な人は、Motivator に動機づけられ、精神的な病気の状態にある人は、Hygiene Factor に動機づけられる傾向があるとしている。この考え方を検証しようとしたこれまでの研究は、分裂病を含む重篤な精神障害を有する人々と、正常な人との動機づけのタイプを比較するという方法をとって行われてきた。研究結果は、おしなべてこの考え方を支持してはいるが、比較の対象に重篤な精神障害を有する人々の群をとっているがために、説得力に欠ける面がある。

一方、Jahoda によって概念化された、Positive Mental Health と職務満足との関係についての研究もなされており、両者に正の相関のあることが見出されて

いる。しかし、Positive Mental Health という概念は定義するに難しく、しかも、高い水準の欲求に関する職務満足概念との異同がつき難いという問題を有している。

本研究では、Alderfer のERG理論を枠組みとして、欲求満足、欲求構造の側面から、精神的に健康な人と、そうでない人の比較を行うことにした。なお、本研究でいう精神健康とは、精神的・身体的自覚症状が無いか、もしくは、あっても極めて軽度な状態にあることをいう。

II 方法

被験者：3つの異なる組織に属する男子職員。電力会社—169人、都市銀行—101人、特殊鋼メーカー—66人の、合計336人。

手続：Alderfer のERG各欲求カラゴリーを反映させて作成した、それぞれ39項目からなる欲求満足度測定質問紙、欲求重要度測定質問紙、それにCMIの3種類の質問紙を上記の被験者に施行した。実施期日は、1979年10月～11月であった。

結果の整理：欲求満足度測定質問紙と欲求重要度測定質問紙については、施行後、項目分析を行い、妥当でない項目を削除し、E need, R need, G need, 各9項目ずつ、計27項目を実際の分析対象に選んだ。項目削除後のテストの信頼性については、十分に高い値が得られた。(α係数 .708～.879)

CMIについては、深町らの開発した神経症判別図によって、領域Ⅰに入る人をⅠ群、領域Ⅱに入る人をⅡ群、領域Ⅲに入る人をⅢ群、領域Ⅳに入る人をⅣ群とした。ただし、領域Ⅳに入る人が比較的少なかったため、Ⅲ群と合わせ、Ⅲ・Ⅳ群とよぶことにした。

III 結果と考察

(1) 欲求分類シエマについて

欲求満足度測定質問紙および欲求重要度測定質問紙への回答を、組織別に因子分析した。手法は、完全セントロイド法で3因子を抽出した後、当該3因子について粗バリマックス回転を行った。その結果、組織によってその因子構造に若干の差異は認められるものの、欲求を、E need, R need, G need の3つに分類することはおおむね妥当であることがわかった。

職場における精神健康に関する研究

又、各欲求間の相関をみたところ、ERG各欲求カテゴリーは互いに排他的ではなく、むしろ相互に依存しているということが明らかとなった。この傾向は、E need と R need, R need と G need という欲求階層の上で互いに隣接しあう欲求間ほど顕著であった。

(2) 欲求満足度・欲求重要度と組織および精神健康との関係について

欲求満足度については、組織によって差異がみられると同時に、図1に示すように個人の精神健康の程度によっても差異がみられた。一般に、精神的に健康な人ほどERGすべての欲求に対し、高い満足を示した。

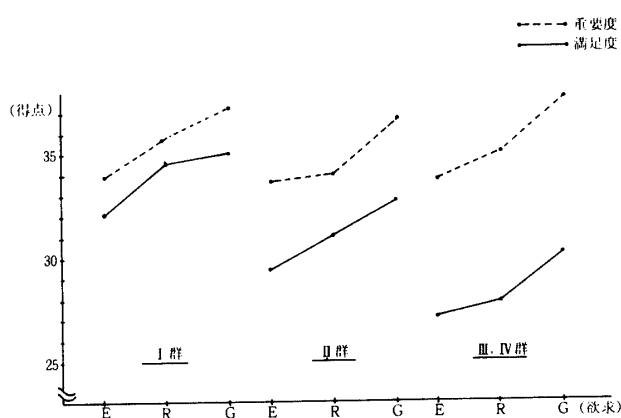


図1 CMI各群別、欲求満足度、重要度得点、プロフィール

欲求重要度については、欲求満足度にみられるほど組織間の差、精神健康の程度による差が顕著ではなかった。

(3) 欲求の階層性（欲求構造）と組織および精神健康との関係について

Alderferの欲求階層に関する7つの仮説の検証については、それぞれの仮説に關係する欲求の満足度と重要度の相関をとる方法を用いた。その結果、組織によって仮説が支持されたり、支持されなかったりするという結果を得た。これは先行研究と一致する結果である。

一方、7つの仮説と精神健康との関係では、表1に示すようにERG階層の上方への動きに関しては、仮説という正の相関が、CMIのI群ではすべての組合せでみられ仮説は支持された。しかし、II群、III・IV群では有意な正の相関関係が崩れ、特にIII・IV群では仮説とは逆の有意な負の相関がみられた。

このことは、Maslowの提唱した欲求に関する gratification / activation 仮説は、精神的に健康な人には適用できるが、障害の程度が重くなればなるほど適用できなくなるということを示している。又、この仮説は、その操作化の段階で欲求満足度と欲求重要度の相関をみるため、被験者の社会的に望ましい反応をめぐり去ることができるという利点を持っている。今後、個人の臨床診断、組織の精神的健康についての風土 (climate) の診断に用いることが可能であろう。

表1 CMI各群別のERG欲求階層仮説にもとづく相関係数

Type of relationship	I群 (n=232)	II群 (n=67)	III, IV群 (n=37)
E. Sat → E. Imp	0.04	-0.07	-0.18
R. Sat → R. Imp	0.25**	0.31*	0.17
R. Sat → E. Imp	0.12	0.18	0.15
G. Sat → R. Imp	0.25**	0.42**	0.19
E. Sat → R. Imp	0.21*	0.06	-0.37*
R. Sat → G. Imp	0.17*	0.24	-0.07
G. Sat → G. Imp	0.31**	0.36**	-0.31

(* p<.05, ** p<.01)

注: Sat = 満足度, Imp = 重要度